お別れのことば

望月清司

小林良正先生

先生が専修大学で教壇に立たれて以来，かぞえきれない教え子たちが，先生の学問とお人柄に魅せられてまいりました。おこがましいことですが，その教え子の一人として皆さんを代表させていただき，最後のお別れのことばをのべたいと思います。

先生，いつかはこうして一杯の花にかこまれたご遺影を仰がねばならぬときがくる，そう思わない日がないではありませんでした。けれども，お手紙で，お電話で，またお目にかかったさいのお元気なお声で，学問へのほとばしる情熱を語ってうまない先生に接したのちは，このままずっと私たちの先生でいらしてくださるという確信のようなものが，ひととき芽生えた不安を霧のように，吹きとばしてくれるのが常でした。

現に先生，昨年末におうかがいした節には，ちょうど届いたばかりの新しい『マルクス・エンゲルス全集』をなでるようにして見せてくださり，完結まで十数年はかかろうという全百巻，その全百巻によって開かれる研究の新地平によせる期待を，楽しげに話してくださったばかりではありませんか。

このたびのあまりにもにわかなお別れ，私ども一同茫然として立ちすくみました。心は千々に乱れ，どのようにこの悲しみを先生のお耳にとどけたらよいのかわかりません。

小林先生

専修大学を定年でお去りになるというとき，先生の一代記をよりよりおうかがいしたことがありました。日本の社会科学史に不朽の名をおとどめになった先生です。お話は，先生独特のユーモアーにもいろどられて，一つ一つ印象深いものでした。

その中でも，先生の唯物史観への接近のされ方が，お人柄を遺憾なく示したものとして私にはとくに鮮烈でした。

先生はこう語られました。私は一高と東大の学生時代，一世をふうびしたあの学生運動にはついに動かされず，ひとすじ新カント派哲学に親しんでいた，そのうちにまさにこのブルジョワ哲学とその歴史方法論への内在的懐疑をとうして，ごく自然に唯物史観とそれに基く経済史学にたどりついた，と。

へいぜい好んでお口にされた「ゴーイング・マイ・ウェイ」という言葉そのまま，先生はご自身の真理探究の道のおもむくままに，この変革の歴史観をわがものとされ，そうであるがゆえに，終生ゆるぎなくこれに誠をつくされました。新しい社会がくるまでは剃り落すまいとのご決意のもと獄舎でたくわえられたときくあのおひげは「マイ・ウェイ」哲学とその所産にたいする先生のたじろがぬご信念のシンボルでした。

小林先生

後進をみちびく師のありかたにギルド型と放牧型とがあるとすれば，「ゴーイング・マイ・ウェイ」の哲学者先生は，申すまでもなく放牧型の師でした。決してそれをあらわに語られることなく，私どもに「わが道をゆけ」とお教えになりました。時に私どもは途方にくれました。しかしそのようなとき，先生はまさにご自身の日々の行(ぎょう)そのもので，私どもをきびしく，そしておやさしくはげましてくださったのです。

きびしくというのは，学問には，ひろく言えば人間の生きざまには，あれとこれを足して二で割ってはならぬものがある。異なったそれらとはおのれを持しつつしのぎを削らなければならない，というおさとしでした。おやさしくというのは，にもかかわらず異なった学問的見解や生きかたにたいして示された絶対的な寛容と尊重のご態度でした。

このような気骨をゆずらぬ真の自由人としてのお人柄こそ，無数の小林ファンをひきつけてやまない魅力だったのです。いささか私事にわたることをお許しください。科学的良心の命ずるままに，古典と現実にとりくもうとされている先生のお姿を見習っているうちに，私はいつしか，学問上先生とはかなりへだたった立場に立つことになりました。しかし，そうした私をも先生がもう一廻り大きな世界にあたたかく包みこんでくださっていることを疑ったことは一度もありませんでした。

そのお立場に蟷螂の斧をふりあげた貧しい著書，それを先生に献げることを心から喜んで許してくださったばかりでなく，これには根本的な反批判をくわえなくてはならないねとおっしゃって，そのための新しい研究を開始されたのでした。

ゲーテに「弟子は師をのりこえることによって師に近づく」との逆説があるとききます。先生は私どもの数歩さきを歩むのをついにおやめにならなかったことで，私ども教え子のすべてに，先生により近づく道をさし示してくださったのです。

思えば，あのヘルペスの激痛に耐えながら，孜々として著述にはげまれ詩作に興ぜられたこの幾年かは，私たちの誰もが，人間がかくも崇高に運命とたたかいうるということを，まのあ

たりにしえた幾年でした。あの強靱な精神にひとたびふれたものは，生涯それを，心弱いおのれへの無限のはげましとすることができます。あのお姿は，私たちがそれぞれのマイ・ウェイを見失わないためのこよなきよりどころとして，永遠に私たちの胸の底に刻みつけられております。

先生，もうお別れしなければなりません。私たち一同言いつくせぬ悲しみにひしがれていますが，お辛かっただろうあのお痛みから解放されホッとしておられる先生を思うことで，たって心をなぐさめようと存じます。

先生，さようなら。

み霊よ，ひたすら安かれとお祈りしつつ，さいごのごあいさつといたします。

1976年1月19日

小林良正先生み霊に

（1976年1月19日，小林先生との永別の会における弔辞）

小林先生の思い出

森下澄男

永別の会

専修大学元学長・同名誉教授・顧問　小林良正先生は，昭和50年12月29日午後5時15分急性肺炎のため，東京都世田谷区北烏山の久我山病院で永眠された。77歳10ケ月。

先生は12月20日，かりそめの風邪が少々心配な状態になったので入院されたが，夫人も容体が急変しようとは思われなかったそうである。従って私たちもご入院のことは少しも知らなかったので，訃報の電話に接した時には，耳を疑ったほどであった。

30日は"友引"だというので，31日に落合葬儀場でご遺族のほか，10数名の大学教職員も参会して，厳かに密葬が行われた。

先生は，或るとき私に"私が死んだら信濃町駅近い千日谷会堂で葬儀を行ってほしいね。小ぢんまりとした良い所ですよ。しかし，儀式的な葬儀や告別式というのはいやだなあ"と，雑談のうちで語られたことがあったので，ご遺族と大学側と相談の結果，先生のご希望に副よう